天にとどく青

中村真里子

健太（けんた）

「何してるんだ！」
いきなり大声でどなられて、健太は首をすくめた。
「朝顔抜くな！　なんてことするんだ！　おまえ、小学校の子だろ！」
健太がふりむくと、中学生が両手を拳に握りしめて立っていた。
怒ってる。
健太は、手に持った朝顔の茎を見つめた。
「出てけ！　自分の学校へ帰れ！」
指の間から、朝顔が落ちた。健太は、くるりと向きを変えて走り出した。
小学校と中学校は隣り合っている。境のフェンスにすきまがあって、細くて小さい健太はそこから中学に入ったのだ。
健太は、ずっと気になっていた。先月から、中学の校舎の前に置かれたプランターの朝顔だ。教室の、健太の席からよく見える。
小学校で健太がまいた朝顔は、もうどんどん花をつけているのに、中学の朝顔は、伸びるだけ伸びて、ちっとも咲こうとしないのだ。もしかしたら、花の咲かない悪い朝顔なんじゃないか。そんならさっさと抜いてしまって、別の花を植えたほうがいいのに。抜いたあとに、オレの朝顔植えてやったっていいや。
だから、昼休みにちょっと抜け出して、朝顔を抜きに行ったのに。怒られるなんて、ちぇっ。
怒られるのは嫌だ。そりゃ誰だってそうだろうけど、健太自身はいつだって悪いことをするつもりなんかないのに、物事が勝手に怒られる方向に曲がってしまうのだ。
教室に戻ると、もう午後の授業が始まっていて、今度は